

沈從文『辺城』論（四）

黄 媛玲

HUANG Ailing

七 歌と太鼓

1934年1月に『辺城』の連載を始めた直後、沈從文は危篤の母親を見舞うため、10年ぶりの故郷への旅路についた。『辺城』の結末は、1933年に青島の嶗山で弔い儀式の行列で幡を捧げ持つ幼い女の子の姿を目にした時点ですでに着想を得ていたことを告白している¹、『辺城』の筋書きは旅の前ですでにできていたと考えられるが、『辺城』連載途中での帰郷の旅に触発されて執筆した12篇の紀行作品は、『辺城』を理解するためにぜひとも合わせ読みしなければならない重要な作品群である。

このとき、沈從文は1924年12月に文壇に登場してから満十年になる。その間、得意とする短篇小説のほか、白話詩、狂言、擬曲、現代劇、小品文、中篇小説、文学批評、自伝、伝記など、ありとあらゆる文学形式の創作に挑戦し続けてきたが、ここで紀行という文学形式を通して新たな成果を作り出した。今回の帰郷では、青少年時代の苦難に満ちた経験で育まれた博愛心を根底に、国家的視野を持って湘西という特殊な地域の長所と短所を分析できるようにになっていた。1934年4月から1935年5月にかけて発表された11篇の作品を集めた『湘行散記』（1936年3月刊行）²は、現代中国文学の最高傑作と

言っても良い。物産や経済分析などの社会的内容をふんだんに含みながら、読み物としてまったく退屈しないのは、五感に訴えるこの上なく豪華絢爛な修辭とエキゾチックな抒情性を凝らした文体のなせる業である。しかも、この作品群には一人として偉人なる者はおらず、湖南西部沅水一帯の独得な風土に生きる数多くの名もない兵士、船乗り、妓女と匪賊の群像を叙述の中心に据えているのがその特徴である。

さて、筆者がここで注目したいのは、『湘行散記』に収められた作品のうち、最初に発表された「鴨窠圍の夜」（1934年4月1日刊）中の次の一節である。

河面靜靜的，木筏上的火光小了，船上的燈光已很少了，遠近一切只能藉著水面微光看出個大略情形。另外一處的吊腳樓上，又有了婦人唱小曲的聲音，燈光搖搖不定，且有猜拳聲音。我估計那些燈光同聲音所在處，不是木筏上的簾頭在取樂，就是水手們小商人在喝酒。婦人手指上說不定還戴了從常德府為水手特別捎來的鍍金戒指，一面唱曲一面把那只手理著鬢角，多動人的一幅畫圖！我認識他們的哀樂，這一切我也有分。看他們在那裡把每個日子打發下去，也是眼淚也是笑，離我雖那麼遠，同時又與我那麼相近。這正同讀一篇描寫西伯利亞方面的農人生活動人作品一樣，使人掩卷引起無言的哀戚。³

河面は静まり返り、筏の上の火の光は小さくなり、船上の灯火もすっかり少なくなっていて、遠近のすべては水面のほのかな光でおおよその状況が見てとれるだけだ。少し離れた一軒の吊脚楼では、再び小唄をうたう女の声がして、灯がゆらゆらと揺れ、拳を打つ声も聞こえた。そうした灯がともされ声のしている所では、筏の主が遊んでいるか、水夫たちや小商人が酒を飲んでいるのだろうと私は推測した。女の指には水夫がわざわざ常德府から持ってきてくれた金メッキの指輪がはめられているかも知れない。小唄をうたいながらその手で鬢のほつれを搔き上げている。胸を打つ絵になる光景だ。私には彼らの哀しみや歓びがわかる、これらすべては私と無縁ではない。そのように泣いたり笑ったりして毎日を過ごしている彼

らは、私からとても遠いようで、同時にとても近い存在なのだ。彼らのそのような姿を見ると、シベリアの農民の生活を描いたある感動的な作品を読み終えた時と同じように、名状しがたい悲哀を誘われるのだ。⁴

『湘行散記』からほぼ半世紀後に公開された（1992年出版の『沈従文別集』第1冊『湘行集』所収）沈従文が旅の途次の船中で書いた、新婚の妻張兆和に宛てた一連の手紙——『湘行書簡』は、作家の当時の身体的精神的状態をよりリアルに伝え、『辺城』の深層を理解するための重要な資料となっている。作家の目に入った光景、耳に入った水夫たちの罵り合いの言葉や川面に漂う魅惑的な船歌、体を感じる船底の川の流れ、早瀬にさしかかった船の傾き具合などをまるで実況報告のように書き綴っているが、鴨窠園に停泊中に書いた手紙には、上記引用部分とほぼ同じ内容が含まれている。

我歡喜那些在半天上的樓房。這裡木料不值錢，水漲落時距離又太大，故樓房無不離岸卅丈以上，從河邊望去，使人神往之至。我還聽到了唱小曲聲音，我估計得出，那些聲音同燈光所在處，不是木筏上的簾頭在取樂，就是有副爺們船主在喝酒。婦人手上必定還戴得有鍍金戒子。多動人的圖畫！提到這些時我是很憂鬱的，因為我認識他們的哀樂，看他們也依然在那裡把每個日子打發下去，我不知道怎麼樣總有點憂鬱。正同讀一篇描寫西伯利亞方面農人的作品一樣，看到那些文章，使人引起無言的哀感。⁵

私はあれらの中空の二階建て住居が好きだ。ここでは木材はただ同然だし、川の増水と渇水時の水位差が極めて大きいので、建物はどれも水際から三十丈以上も高く離れた場所にあり、川辺で見上げると、全くうっとりさせられます。それから、私には端唄を歌う声が聞こえていて、私の見当ではああいっただの歌声と灯のある所では、筏の船頭が気晴らしをしているか、そうでなければ、兵隊さんや船主が酒を飲んでいるのだ。女性の指にはきっと金メッキの指輪がはめられているに違いない。何と感動的な光景だろう。こういったことを口にする、私は憂鬱な気分になってしまうのだ。彼らの悲しみと喜びは私にはよく分かるし、彼らが相も変わらずその

ように日々を送るのを見て、私はわけもなく必ず憂鬱になるのだ。これはシベリア方面の農民を描いた作品の文章を読んだときと同じで、名状しがたい悲哀を誘われるのだ。⁶

紀行作品として公にされた『湘行散記』の各篇は、『湘行書簡』に比べれば、はるかに社会性に富んだ内容を盛り込んで仕上げられているが、その代わり、書簡の随所に見られる作家の心情告白はほとんど見られない。しかし、「鴨窠園の夜」のこの部分の記述に関しては、ほぼ手紙の内容そのままに心情を吐露している。彼が故郷の人々の暮らしを見たときに感じる悲哀を理解するためには、かつて読んだというシベリア方面の農民を描いた作品を突き止める必要があるように思う。

すぐに連想されるのは、周作人が訳した「瑪加爾的夢(基督降生節的故事)」(マカルの夢—クリスマスの物語—)⁷というシベリア東部の農民を描いた作品である。沈從文が1927年に書いた「雪 — 在叔遠的鄉下，你同叔遠同叔遠母親的一件故事」⁸ (1927年10月27日刊行) という自伝的作品の中で、この作品に言及したからである。

「瑪加爾先生他捕狐不就正是在雪中嗎？」(「マカルさんが狐を捕ろうとしたのは、雪が降ったただ中のできごとではなかったの?」)

我還不曾見過這活的狸子在木下掙扎情形。只是從那本書上，我的確明明白白夢過多次狐狸亮亮的眼睛在林中閃爍的樣子。(私は生きた狐が丸太の下でもがく様子をこの目で見たことはまだなかった。ただその本を読んで、私は狐の目が森の中できらめく光景を、間違いなく夢の中で何度も見た。)

「瑪加爾的夢」は、周作人の翻訳で『新青年』第8巻2号(1920年10月1日)に発表され、1927年3月にさらに単行本として刊行されている。⁹「雪」に描かれた内容が真実に基づいたものとするれば、沈從文とその友人満叔遠は、1920年には『新青年』に載った「瑪加爾的夢」をすでに読んでいたことになる。

そうでなくとも、1927年10月にはその作品を読んでおり、かつ、その作品が非常に強い印象を与えたことが伺える。

「瑪加爾的夢」を一読すれば、明らかにそこから『辺城』に取り入れられたものがあるのに気づく。老船頭の「那是好的，那是妙的」の口癖である。また「瑪加爾的夢」の中で描かれた、煙草の葉を人に分け与えようとせず、焼酎を妻と分かち合わずに一人占めた利己的マカルを意識した設定であるかのように、『辺城』では、老船頭が酒を他人に勧める場面、たばこの葉を人に分け与えたり、夏の暑い時に船の乗客がのどを癒すことができるようにお茶を用意する場面がことさら鮮明に描かれている。もちろん、それは、「瑪加爾的夢」から着想を得たとしても、実に中国の一般庶民の気前良さを示す習慣に合致したものであり、特別な作品材料の取り合わせであるとは気づかれにくい。

また、マカルは、生前人騙し・怠け者・飲んだくれであったかどで死後なお重い裁きを受けることに憤然と抗議し、生前に自身にふりかかった災難と与えられた労働の重さと報酬を証拠に雄弁に反論し、ついには裁きの「天」秤の傾きを逆転させたが、その抗議の根幹をなす有力な言葉が「不公平」という言葉だ。これも『辺城』では、老船頭と二老の言葉の中に三回使われている。しかし、歌によって翠翠の心を獲得する公平な競争において、二老が兄さんの代わりに歌い勝負を運に任せることを公平なやり方だと主張する。それがかえって兄の自尊心を傷つけ、悲劇を生んだように感じられる。

沈従文は「瑪加爾的夢」という作品の中から多くを学んだばかりでなく、作品の後に付けられている解説の部分からも多く創作のヒントを得た。周作人はこの作品を Marian Fell の英文訳から翻訳しているようだ。解説部分の大半は、Fell による評論の翻訳であると明言している。それによって作者コロレンコの家系と出身地の民族的背景、貧困や流罪の経験、その創作の数々の特徴などについて、非常に詳細な紹介を加えている。¹⁰

Fell の評論によれば（以下 Fell の文章要約は、周作人の中国語訳からの重訳）、ウラジミール・コロレンコは 1853 年に、ロシア西南小ロシアの小さな

町に生まれた。父方はコサックの旧家の出身で、母親はポーランド人地主の娘であった。彼は美しい絵画さながらの環境の中で少年時代を過ごし、ポーランド人・ユダヤ人・黒い瞳の小ロシア農民たちの間で成長した。そのため穏やかで明るい空の下で育まれた、自然に対する詩的な愛情と健全なユーモアの気質を生涯を通じて失うことがなかったという。これは、国と民族を変えれば、漢族と苗族の混血であるという自分自身の出自と故郷への愛着の情にもあてはまるものだと沈従文自身も気づいていたかもしれない。

またFellの紹介によると、コロレンコはるかシベリア東部のヤクーツクに流刑となった。ヤクーツクで過ごした6年間は、彼の人生においてもっとも貴重な時期であった。極地の沼沢を覆う、酷寒に閉ざされた陰鬱で広大な森林は、若い芸術家の想像力に磨滅することのない深い印象を刻み込んだ。人跡未踏の荒れた森林に住む半野蛮的な開拓者たちの悲哀、流刑にされた仲間の馴服しない精神、脱獄犯であるさすらい者、シベリア大陸を徒歩で横断して母なるロシアに帰った人の冒険生活、これらがすべて彼を感動させた。そこから放免されてロシアに戻った後に発表したのが「瑪加爾の夢」で、この小説の成功で、あつという間に作家の名声を確かなものにした、とある。沈従文が20歳まで過ごした故郷の湖南西部はシベリアほど過酷な自然環境でないにしても、清朝の為政者の抑圧に反逆的な異民族（苗族）・匪賊の多い、疎外された辺境地域である点には共通点がある。

周作人はFellの評論の翻訳の後に、コロレンコに対する評価について、さらに次のように付け加えている。「……詩のような自然描写にはツルゲーネフの趣がある。しかし、小説中のユーモアは彼にしかないものである。小ロシアの温もりに満ちた諧謔とポーランドの華麗な想像力は、両者相まって彼の小説の特色を作りあげ、同じく小ロシア人であるゴーゴリーの「笑いの中に涙ある」著作を想起させる」。これは周作人自身の読書経験による批評なのか、コロレンコに対する一般的な批評なのか知るよしもないが、作家修行の沈従文に多大な啓発を与えたに違いない。どの作家の特徴も勉強家の沈従文のうちに吸収され、彼の作品を論ずるときに当てはまるような感がある。

先に挙げた「雪」という作品は、沈従文と連れ立って湖南から上京した友

人滿叔遠の死を悼んだ作品であるが、友はわずか4か月で北京での生活に耐えきれずに故郷に戻り、3年も経たないうちに死んでしまった、ということ、同時期に書いた同じ友を追悼する作品「船上岸上」の前書きに記されなければ、およそ「雪」という作品が追悼のための作品とは分らない。「笑いの中に涙あり」こそは沈從文の作品の特徴である。試しにみるがよい。「瑪加爾的夢」の中の老人の死を予感させる雪は、ここでは、少年の遊び心と母の慈愛を際立たせる背景として、光と生氣と彩色に生まれ変わっている。

掀開被看，已經滿房光輝了。

布団を払ってみると部屋中は光に満ちている。（外は雪だから）

雪是落得怪熱鬧，像一些大小不等的蝶蛾在飛，並且打著旋。

雪はむやみに元気よく降っている。大小さまざまな蝶が飛んでいるよう。それも渦巻きを描きながら。

老人一進房，就用手去彈那藍布包頭上的雪。

老婦人は部屋に入ると、藍染の頭巾におりた雪を手で払った。

さて、周作人が「瑪加爾的夢」について次のように分析しているところは、『辺城』の場面設定と構成に大きく影響を与えているように思われる。

マカルと老人、天使、神父との問答の中には6回「言ってごらん」という言葉があったが、たぶんシベリアの住民の習慣であろう。大平原の中に散らばった文化の低い民族は、日頃読むべき書籍・新聞を持たず、ただ来客の折にのみ、ニュースを聞きたいという欲求を満たすことができる。これは、中世および現代の辺鄙な地方の人々が歌や講談を好むのと同じだが、これが上記の習慣の始まりではないのだろうか。¹¹

沈從文もまた『辺城』の中に歌と講談を取り入れた。翠翠が口ずさむ「神を

迎える巫師の歌」と、講談風小説『説岳全伝』がそれである。『辺城』における物語進行の時間軸は、3回の端午の節句の龍船競漕の見物によって形成されているが、端午の節句の龍船競漕の説明のところ、それとなく『説岳全伝』と関連づける。

每當兩船競賽到劇烈時，鼓聲如雷鳴，加上兩岸人吶喊助威，便使人想起小說故事上梁紅玉老鸛河時水戰擂鼓。牛臯水擒楊么時也是水戰擂鼓。¹²

二艘の船の競漕が激しくせり合ってくると、太鼓の音は雷鳴のように轟き、さらに河の兩岸で人々が加勢の関の声を張り上げる。その有様は、小説の話にあるかの梁紅玉の老鸛河における水戦の太鼓を叩く場面や牛臯が楊么を生擒りにする水戦で太鼓を叩く場面を連想させる。¹³

なぜ沈從文がここで『説岳全伝』を用いたか、その理由は、『湘行散記』の「箱子岩」の一篇から読み解くことができる。この紀行の書き出しは、かつてここで見た端午の節句の龍船競漕の風景を綴った非常に美しい描写となっている。

十四年以前，我有機會獨坐一隻小篷船，沿辰河上行，停船在箱子岩腳下。（中略）那一天正是五月十五，河中人過大端陽節。箱子岩洞窟中最美麗的三隻龍船，皆被鄉下人拖出浮在水面上。船隻狹而長，船舷描繪有朱紅線條，全船坐滿了青年橈手，頭腰各纏紅布，鼓聲起處，船便如一枝沒羽箭，在平靜無波的長潭中來去如飛。河身大約一里路寬，兩岸皆有人看船，大聲吶喊助興。¹⁴

十四年前、わたしは小さな苦船を借り切って辰河を遡り、箱子岩の下に船を停泊させる機会があった。（中略）その日はちょうど五月十五日、河沿いの人々は端午の節句を祝っていた。箱子岩の洞窟の中で最も美しい三艘の龍船は、早くから地元の人たちによって引っぱり出され、水上に浮かんでいた。船は細長く、船べりには朱色の線が引かれ、どの船にも頭と腰に赤い布を巻き付けた漕ぎ手の青年がいっぱい乗り込み、太鼓の音がドンと

鳴るや、船は一本の羽のない矢のように、流れの静かな長い漕とろの中を飛ぶように往来した。河幅は約一里[五百メートル]、兩岸には見物人が詰めかけ、大声を張り上げて声援を送り、場を盛り上げた。¹⁵

しかし、1934年の帰郷の時、船をわざわざ箱子岩に停泊させた沈從文は、1920年当時の情景と現在の情景を比べながら、非常に憂鬱な気持ちになった。

我獨自坐在一家小飯舖柴火邊烤火。……舖子裏人來來往往，有些說兩句話又走了，有些就來鑲在我身邊長凳上，坐下吸他的旱煙。有些來烘腳，把穿著濕草鞋的腳去熱灰裏亂攪。……這裡是一群會尋快樂的鄉下人，有捕魚的，打獵的，有船上水手與編制竹纜工人。……這些人每到大端陽時節，皆得下河去玩一整天的龍船。平常日子卻在這個地方，按照一種分定，很簡單的把日子過下去。每日看過往船隻搖櫓揚帆來去，看落日同水鳥。雖然也有人人事上的得失，到恩怨糾紛成一團時，就陸續發生慶賀或仇殺。然而從整個說來，這些人生活卻彷彿同“自然”已相融合，很從容的各在那裡盡其性命之理，與其他無生命物質一樣，惟在日月升降寒暑交替中放射，分解。¹⁴

わたしはひとり一軒の飯屋の焚き火のそばに座って火にあたった。(中略)店のなかはひっきりなしに人が行ききして、二言三言話してすぐ出て行く者もあれば、わたしの側の長い腰掛けに割り込んできて、腰を下ろして刻みタバコを吸う者もいた。中には足をあぶりにきて、濡れた草鞋を履いた足を熱い灰の中に突っ込んでやたらにかき回す者もいた。(中略)ここに集まるのは楽しみを見つけることに長けた田舎の男達だ。漁師もいれば猟師もいる、船の水夫や竹縄作りの労働者もいる。(中略)これらの人々は旧暦五月十五日の端午の節句がくるたびに、みな河に下りて行ってまる一日中龍船遊びをするはずだ。しかし普段の日には、この土地で一種の宿命に従って、ごく単純に日を過ごす。往来する船が櫓を漕ぎ帆を揚げて行ききするのを眺めたり、落日と水鳥を眺めたりする毎日だ。彼らにも同じように人間関係での利害得失があり、恩や恨みの感情がもつれて解けぬときには、次々に祝い事なり刃傷沙汰が起きることもある。しかしながら全

体的にいうなら、これらの人々の生活は「自然」とじっくり溶け合っているようで、従容としてそれぞれが自らその生命の理を尽くしており、他の生命を持たぬ物質と同じように、ただ日月の昇降、寒暑の交替の中で放射し、分解する。¹⁵

另外尚有一批人，與自然毫不妥協，想出種種方法來支配自然，違反自然的習慣，……然後者卻在改變歷史，創造歷史。一分新的日月，行將消滅舊的一切。我們用什麼方法，就可以使這些人心中感覺一種“惶恐”，且放棄過去對自然和平的態度，重新來一股勁兒，用划龍船的精神活下去？¹⁴

ところが一方にはこれとは全くちがう人々の集団がいる。彼らは自然と少しも妥協せず、さまざまな方法を考え出して自然を支配し、自然の習慣に背こうとする。(中略)しかし後者は少しづつ歴史を変え、歴史を創造しようとしている。新しい時代は、やがては古い一切のものを消滅させるであろう。我々はどうのような方法を用いたら、これらの人々の心の中に一種の「脅威」を感じさせ、かつこれまでの自然に対する平和的な態度を放棄させ、改めて龍船を漕ぐときの精神で力を振り絞り生き抜くように仕向けることができるのだろうか。¹⁵

かくも無防備に自然の中で暮らしている男たちが、やがてふりかかる国家的災難において団結して戦う精神をもつように仕向ける方法は何だろうかと、作家の憂いをここにはっきりと告白している。国を憂い沉水を放浪して川に身をなげた屈原を慕って始まったという龍船競漕は、六世紀に書かれた『荆楚歳時記』にすでに記載があり、1400年以上もの伝統を持つ年中行事であるため、『辺城』の物語の背景に龍船競漕と太鼓の音を設定することはむしろ非常に平和の世界を連想するしかないだろう。「箱子岩」における上記の文章によって、初めて沈從文が『辺城』に託した思いが見えてくる。

『説岳全伝』の主人公岳飛は悲劇的な結末を迎えた武将であったが、彼の母親が息子の背中に「精忠報国」の入れ墨をした話は余りにも有名で、歴史的に中国人にもっとも尊敬された英雄である。そして、船の物見櫓に登り、自

ら戦鼓を叩き、金の大軍との戦いを指揮し勝利に導いた梁紅玉は歴史上類まれな賢い女武将であるが、彼女はもとは妓女であった。また『説岳全伝』は、岳飛に服従した匪賊たちが命を顧みず金軍と果敢に戦ったことを活写した庶民に歓迎された小説である。『辺城』の二老を岳飛の息子岳雲にたとえたのも、『説岳全伝』を意識させようとした試みである。ところで、『説岳全伝』の中で岳雲に夢の中で武術を授けた神将の一人南霽雲は、唐代の「安史の乱」の際に功績を立てた有名な武将である。彼はもとは船乗りであった。

つまり、『辺城』に登場する人物、『湘行散記』に登場する人物は、『説岳全伝』で活躍する人々を彷彿とさせ、彼らはやがて抗日戦争において持ちこたえる力を頼みとされる人々、そして大きな犠牲を払うことも予想される人々なのである。『辺城』の老船頭が口にする「天意」という言葉は、『説岳全伝』の戦いにもっとも頻繁に使われた言葉であり、吉も凶も、勝ちも負けもすべて受け入れる中国人の人生哲学を表すことばである。老船頭が亡くなり、一人取り残され泣き悲しむ翠翠に、船総順順は、「不要發愁，一切有我！」老馬兵も、「不要哭了！你放心，一切有我！」と声をかける。「一切有我」（万事私が引き受けたよ）は、二老のような若者が（現実では戦争のために）故郷を去り、故郷に残って地方を守る男たちへの沈従文からのエールなのである。「不要哭」（泣くな！）この言葉は、『説岳全伝』でいつも勝利をもたらす福将牛臯がもっともよく使うことばである。

このように考えれば、翠翠の巫師の歌に原始信仰とはかけ離れた歴史人物を引き合いにした歌詞の一節があるのも、不思議ではない。

洪秀全，李鴻章，你們在生是霸王，殺人放火盡節全忠各有道，今來坐席又何妨？¹⁶

洪秀全，李鴻章，生前あなたたちは霸王，殺人放火、尽節忠義、各々道は違えど、いまは、さあご一緒に席に付かれませ。¹⁷

李鴻章と洪秀全を借りて、一九三四年当時の政権につく側と革命運動を展開する側の和解を呼びかけたのである。

注：

- ¹ 『辺城』「新題記」（1948年）、『沈從文全集』第8巻第60頁、北岳文芸出版社、2002年
- ² 『湘行散記』1936年初版本、1943年改訂本は共に「滕回生堂今昔」の一篇を収録せず11篇であった。『沈從文全集』第11巻第222頁、同上参照。
- ³ 『沈從文全集』第11巻245頁、同上。『文学』2巻4号（上海文学社）原載
- ⁴ 『湘行散記』第39頁、小島久代訳、好文出版、2008年。参照改訳
- ⁵ 『沈從文別集』『湘行集』第56頁、岳麓書社、1992年5月
- ⁶ 『沈從文湘行書簡——沅水の旅』第58頁、福家道信訳、白帝社、2018年。参照改訳
- ⁷ 日本語訳名「マカルの夢—クリスマスの物語—」は『周作人日記』1920年11月書日記載の布施延雄訳に基づく。越山堂、大正9年
- ⁸ 『沈從文全集』第2巻第15頁、同上。1927年10月27日「晨报副刊」原載
- ⁹ 『瑪加爾の夢』北新書局、1927年3月初版6月再版、『民国時期総書目・外国文学』第257頁、書目文献出版社、1987年
- ¹⁰ 『周作人訳文全集』第9巻第123～127頁、世紀出版集団・上海人民出版社、2005年。『周作人日記』（上）第800頁、1918年書目3月に「マカルノ夢」英文フエル訳書、同上（中）第181頁、1920年書目11月に「悪イ仲間」布施延雄訳書、大象出版社、1996年
- ¹¹ 『周作人訳文全集』第9巻第127頁、同上
- ¹² 『沈從文全集』第8巻第74頁、同上
- ¹³ 『辺境から訪れる愛の物語——沈從文小説選』第226頁、小島久代訳参照改訳、勉誠出版、2013年。『現代中國文學全集』8『沈從文篇』第20頁、松枝茂夫訳参照、河出書房、昭和29年
- ¹⁴ 『沈從文全集』第11巻第277頁～、同上
- ¹⁵ 『湘行散記』第98頁～、小島久代訳、同上。参照改訳
- ¹⁶ 『沈從文全集』第8巻第97頁、同上
- ¹⁷ 『辺境から訪れる愛の物語——沈從文小説選』第261頁、小島久代訳、同上。翠翠の「巫師迎神的歌」は、『辺城』1934年10月初版本では三節のみ、1943年9月開明書店改訂本では五節となっている。「辺城題識五種」『沈從文全集』第14巻第443頁注⑧参照。引用部分は初版本からすであつた。